— ひとと時代をつなぐ —

めぐりっと紫波

[Vol.72]　2023(令和5)年9月27日
発行者　ＮＰＯ法人紫波みらい研究所
TEL019-671-2244 FAX019-671-2243
E-mail miraiken@shiwa-mirai.com

◇◇◇海洋ごみについて考えよう！◇◇◇

7月8日（土）「滝名川で海洋ごみについて考えよう！」（主催：紫波みらい研究所、共催：山王海土地改良区）を滝名川中央頭首工付近で開催しました。参加者は町内の親子など 22 人でした。この事業は県の海岸漂着物の発生抑制につながる取り組みの一環として行われたものです。

山王海ダムから流れる滝名川の水は一級河川であり、紫波町西部の田畑を潤しながら北上川へ、そして海へと続いています。参加者は「海洋ごみのおはなし」を聞いたあと、滝名川の水質を調べ、川に入ってどんな生き物が棲んでいるのか探してみて、滝名川がきれいな川であることを確認しました。

そのあと、川の周辺のごみ拾いを行い、紫波町に住む私たちがこのきれいな川を守り、海洋ごみを出さないためには、どのようにしたらよいか一緒に考えました。

海洋ごみの 80％は「街」から出ています。

拾っても、拾っても、なくならない海洋ごみ、その80％は私たちが暮らす街から出て、川を伝って、海へと流れて着くといわれています。

私たち一人ひとりの生活や行動が、実は海へとつながっているのです。

海洋ごみの半数を占めているのはプラスチックごみ

海洋ごみといっても様々な種類があります。中でも半数を占めているのが「プラスチックごみ」です。素材・性質上滞留時間が長く、中には 400 年以上海の中を漂うものもあるといわれています。2050 年の海は魚よりもプラスチックごみの量が多くなると予想されています。

特定外来生物 オオハンゴンソウを駆除してください！

近年、東北各地で背が高くて黄色の花が咲く外来植物が増えています。
花はきれいですが。実はやっかいな植物です！

■オオハンゴンソウ?どんな草？

・原産地は北アメリカ。キク科の多年生草本。
・草丈は1m～3mほどの黄色の花で、開花期は7～9月で土が肥えていて、湿った場所を好みます。

■花はきれいなのに、なぜ？

・繁殖力が強く、在来の植物の生育を妨げるなど、地域の生物多様性が失われてしまいます。
・外来生物法で「特定外来生物」に指定されおり、栽培や生きたままの植物の運搬は禁止されています。

＜ 駆除方法 ＞

・オオハンゴソウは、種（たね）と根で増えます。駆除のポイントは **①新たな種を散布させない。②根茎を取り除く。** の二点です。
・種が出来る前に根ごと掘取り、土を取り除いてその場で乾かし枯らせます。根が土の中に残らないようにします。
・根茎を素手で抜くことは困難なため、スコップや根堀りなどの道具を使いましょう。
・他人の土地で駆除作業をする場合は、無断で立ち入らないよう注意してください。

★まずはここから
自分の庭や畑に生えていたら、駆除しましょう！

外来生物被害予防3原則　入れない・捨てない・拡げない

（環境省東北地方環境事務所ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　外来生物対策より引用）

紫波町内でエコな取り組みをしているエコ・ショップしわ認定店をシリーズで紹介しています。
今号では日詰商店街の「天狗寿司」をご紹介します。

当店は環境を守るエコ・ショップです！

旬の魚と旨い酒、そして何より居心地の良い空間をモットーに
日詰商店街の裏路地で 50 年以上営業している老舗です。

おすすめは♪

◇すしランチ

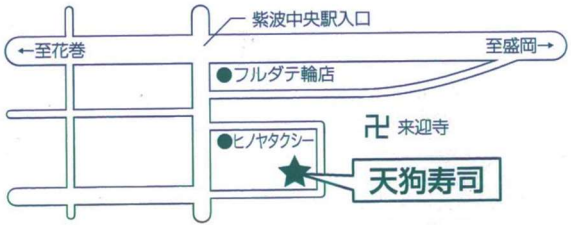
ここでしか味わえない
◇寿司ビビンバ

旬の情報は
天狗寿司の
Facebook から

営業時間：11:30～14:00
17:00～21:00
定休日：月曜日
場　所：紫波町日詰字東裏５
駐車場あり
ＴＥＬ：019-676-2651

ここがエコポイント!!

◆「もったいない・いわて☆食べきり協力店」食べ残しが無いように小皿料理で提供しています。
◆ランチは「エコ箸」を使用しています。
◆地元の旬の食材を使った料理で地産地消！



省エネ・節電豆知識

江戸時代に学ぶエコ生活

250 年以上続いた江戸時代。電気やガスはないそのころ、人々は資源を大切に使い、リサイクルに努めていました。その江戸時代の暮らしから現代にも活かせる暮らしのヒントを学びましょう。

徹底したリサイクル文化

江戸時代は物資が限られており人々が所持できる分も少なかったため、衣類も食器も徹底的にリサイクルして使う文化が定着していました。とはいえ決して無理にリサイクルをしていたわけではなく、楽しみながらリサイクルしていたようです。

例えば着物などは、帯や小物を組み合わせて変化をつけることでお洒落に気回していました。また、江戸時代は古着屋がかなり多く、市場に出回っている着物の大半は古着でした。
古着屋では着物だけでなく端切れなども扱っていたので、それを襟や裏地などに縫い付けて個性を出していたそうです。

何度も着回してさすがにほつれや擦り切れが目立つようになってきた着物は、今度はおむつや雑巾としてリサイクルされ、ボロボロになるまで使い切った後はかまどや風呂釜などの燃料にも使われました。それで終わりかと思いきや、燃やし尽くした後の灰さえも、農業、酒造、陶器づくりに利用されるなど、限界まで使い抜かれていました。

めぐりっと紫波は、紫波町産業部環境課の委託事業で発行しています。